文芸島に迷い込んだ旅人たちへ

月刊エトランゼ

創刊号(1)
2014.01.08

陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆきます。

日芸初の月刊ライトノベル誌、創刊

【新連載】

レストラン・グラフィティ

Q　／イラスト　篠屋

フィッツロビンと前向きな街

竹見名央　／イラスト　えりな

【読み切り短編】

舞々コンタクト

池之沼気違衛門　／イラスト　積塵

【特集】

今すぐ応募できる文学賞

巻頭カラー

レストラン・グラフィティ
Q
イラスト　篠屋

MgMg

フィッツロビンと前向きな街

竹見名央

イラスト　えりな

舞々コンタクト
池之沼気違衛門
イラスト　積塵

月刊誌とは

エトランゼは、情報誌と文芸誌の特色を併せ持った月刊ムック誌になります。
メインコンテンツとして、連載ライトノベルを数作品ずつ掲載するほか、 サブコンテンツとして、陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆく予定です。

KMITの既刊誌　好評販売中！

お求めの際はこちらのアドレスまで　kmit.kemmy@gmail.com
電子書籍もあります。

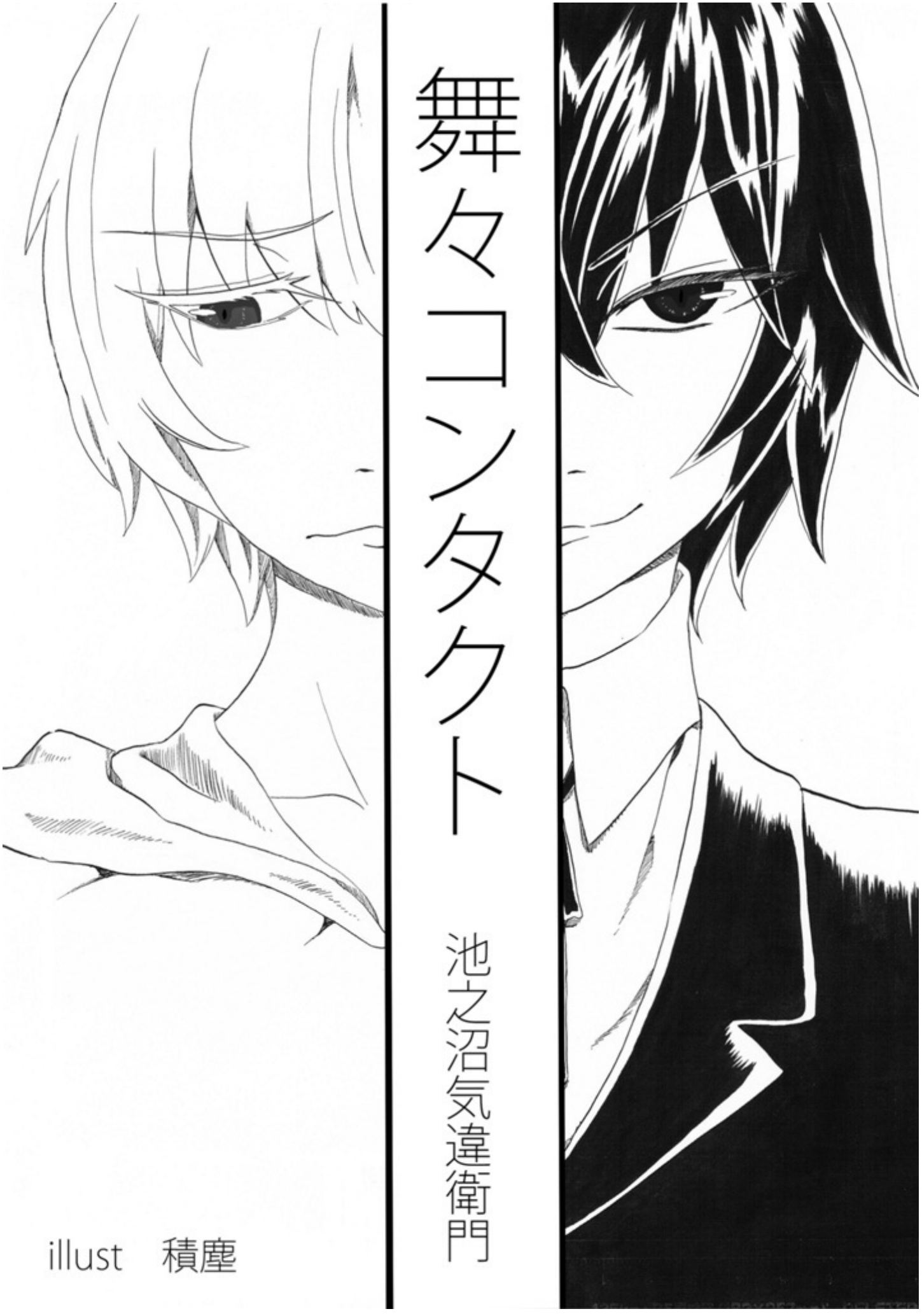
次刊予告

新連載３タイトル追加予定
※タイトルは変更される可能性があります

【新連載第三弾】ＣＣＣ（クロノクロスクロニクル）　修平

【新連載第四弾】紅妹（べにいも）タルト　　城野伊織

【新連載第五弾】カタツムリガール　霜山モリス



舞々コンタクト

池之沼気違衛門

illust　積塵

　私はじっとまだ幼い彼女を見つめていた。真っ白で賢そう、そう感じていると彼女の煌めくような紅い瞳がこちらを見据えていて――
　――だから、私は微笑んで彼女へと手を振った。
「またね」

　足の踏み場を探すのも厄介な、配線と物に溢れた其処、或る少女が引き籠る部屋は設定温度十八度の冷房により寒々しい。外は日の照り厳しく蝉の声喧しくの、最高気温が更新されて地球温暖化の影響がどうこうの、そんな具合に夏も真っ盛りの頃合いであるが、この部屋に限っては全く以て別次元、炎天下など何処の話か、むしろ冬のような錯覚を抱かせしめてならない。
　部屋の主、其の少女はあろうことか、自身が設けた規定の温度にも関わらず、寒さを凌がんと言わんばかりに毛布包まり、厚着のパーカー着込み、防寒の構えを成しているのだから、省エネルギーに対する意識の低さ、度が過ぎる季節感の欠如といった、いかにもな社会不適合の鱗片がありありと垣間見られる。
　どんな形をした娘か、恐らくは其れ相応の残念極まらんものであろうと察せてならず、であったが、なんと意外にも可愛らしい、萌える。
　地の文にすら揺らぎ生じてならずの、良い意味で予想を裏切った其れは、背丈が低く細っこく、青白の肌をしていて儚げ、若干に伏せられた整いのある憂い顔と合わせて殊更儚げ。
　髪は結べるではなく、かといって短すぎるでもなく、の程好い長さに揃えられて美しい。雪の如し白色の其れは、年季によって色素の抜けた老人のや、物好きがわざわざ染めた色合のとは一線画し、純白折り重ねたような髪艶を散らばせて幻想染みている。
　白い髪で察しが付けば中々に目敏い、彼女は白子であった。故に其の瞳は血色の紅、彼女の為人が浮き出ているのか、微かに暗みを帯びて淀んでいる、が其れもまた物憂げそう儚そうの彼女の印象をより色濃くして、尚良しかな。
　この麗しき彼女が社会に不適合な理由はまた後々として、そもそもこの引き籠り、親との折り合いやら、電気代やらはどうしているのか、等の所帯染みた疑問がふつ、と浮かばなくもないのだが、どうやら杞憂のよう。気にする事が野暮に感ぜられる程の財力の下に生まれ落ちた彼女にとって、金の問題など些細なこと、いや関係のないことであり、思慮の中には片隅どころか壁の染み程度にも入っていない。
　親との折り合いに関しては既に破綻しているも同然の仲、彼女の反抗的な態度に手を焼いて痺れを切らした両親が、何事も経験、一人暮らしを試みよう、といった節の名目の下に体よく隔離する形で今に至る。
　つまるところの其処は、さしずめ手に負えない問題児の隔離施設であるのだが、其の造りは度の超えた金持ち故か莫迦げたもの、というのも現金一括で買い取った一つのマンション、其のすべての壁をぶち抜いて一部屋にしたというのだから、莫迦と言わずになんといようか。庶民には分からぬ世界と一蹴されても、流石にこれはあまりにあまり、言わずもがなにすこぶる広大、無論近所付き合いだの、お隣さんだの煩わしいものは何一つなしの桁違いの品。
彼女の両親が言う事には完全に孤立させることで、他人との付き合いの大切さが――長々しく冗

長な為に割愛させて頂くが、とどのつまりはこれも躾の一環というのである。が、其れにしては詰めが甘い。せめての情け、と彼女へ渡した餞別の額は天文学かと見紛わん程、桁が多くてむしろ御褒美。もっと言うならそもそも其の教育自体がどうにも遠回り、というより逆効果なのは火を見るよりも明らか、完全に采配を誤っている。

証拠にすべての束縛から解き放たれた、と少女がやりたい放題重ねた結果、常人では落ち着かない程の浩々たる広さの大部屋は、物が溢れて塔を成しの、壁を成しの散々足る惨状で今や狭苦しい。床には電化製品の配線が蔦の如く、蔓延り絡まり床一面に広がって絨緞染みてこれまた窮屈。過度に下げられた冷房の数は空間相応の、いや其れでも過剰か、二桁に差し掛からんばかりで、（一応、弁明を入れておくと其のお蔭で電化製品の熱暴走の類が解消できているらしい。ならば製品のパフォーマンスを幾らか削れば良いのに、という正論は扨て置くとして）其処はもはや問題児の隔離施設というよりかは、溺愛する娘への至極恵まれた環境、根城とでも称した方が余程しっくりくるものなのであった。

家族から、学校から、社会から隔絶された場所に生きる、かの引き籠りの少女は眉を顰めていた。其の鋭利な視線が向けられるのはある一点、インターフォンと連動する巨大なモニターに映った、手を振って笑顔の来訪者、其の人に他ならない。

隔離すれども我が子は一応大切なもの、か。彼女の両親が安全を配慮し手を加えた、一つ一つが分厚い金属で構成される何重もの厳戒たる扉、其の一層目、外に面した扉の前で佇む来訪者。其の人物は、身動ぎの度に靡く磨墨を蓄積させ、醸成させた色合いの髪が、淡く艶めいて優美なことこの上ない、端正な面立ちをした少女であった。真夏にも関わらず黒のブレザー、丈長いスカートを着込んで制服姿の其の身形は、ぎん、と照り付ける御天道煌めく炎天下と相俟って、見ているだけでも蒸暑そう暑苦しそう。なれど不思議かな、当の少女は汗一滴も流さずに涼しげで薄気味悪い。尤も引き籠りの少女にとって外の事象、其れも気温なんてものは全く以て蚊帳の外で、来訪者の異常に勘付くまでは至らないよう。

しかれど引き籠りには不確かながら、其の来訪者を一見した、そんな記憶があった。ただ其れが何時、何処のことかまでは靄がかったかに不明瞭、はっきりとせずに癪に障る。彼女の記憶力は常人とは桁違いのある種疾病染みた程で、一度見たものは焼き付けられたかのよう、えてして忘れることなど殆どありえないのであるが、其の殆どが偶然にも今、なのであろう。

意固地に彼女が記憶を浚う其の最中、インターフォンの音が鳴り響いて中断、そして、

「迷子舞々、居ることは分かっているわ。返事をなさい、そして此処へ出てきなさい」

来訪者の声が引き籠りの少女へと、迷子舞々へと届いた。

「……君は誰だ？　何故僕の名前を知っている？」

名を呼び捨てにされた上、大層な上から振りかざすようの物言いでは、彼女の美麗かつ清涼な声色ですら気取っているよう感ぜられてならず、内心苛立ち募らせながらも理性的に振る舞って舞々、来訪者を窺う。平生こんな不躾な真似をされたのならば、十倍返しの罵詈雑言を以て相手するのがこの引き籠りなのであるが、今回ばかりは勝手が違う。自慢ともいえる記憶にも確りと残らずの、其の上自身の在住、名前を知っているとなれば、如何に彼女といえども関係ないで

は済ませられない、慎重になるのも致し方ない、そして正しい。
「私のことは後回し。今重要なのは貴女が出てくるか、こないか。そしてもしこないのなら、どう引き摺り出すか。それだけよ」
来訪者はにこり、と微笑むも、柔らかに細めた目、其の瞳は底が知れずの常闇の黒。先までは丸く可愛らしく輝いていたというのに関わらず、瞬時にして真黒に濁って淀んだ其れが彼女の内側、得体の知れない危うさとしてモニター越しにも伝われば、だらりとよれていた毛布を被り直すは舞々、無意識ながらに緊張感を高めゆく。
「引き摺り出すとは物騒だね。生憎僕はそういう荒事には慣れていないから、丁重に断らせてもらうよ」
僕――舞々の女性らしからぬ一人称は、俗世を離れた彼女にらしい、といえばらしいもの。それに彼女の語り口は何処か気取ったように軽く、皮肉交じりで諧謔さが滲み出ていて賢しそうな。
其れも其のはず、彼女が引き籠るに至った理由は其の特異な外見に非ず、偏に優秀さ、天から授かりし才能故の事。彼女にとって社会はあまりに温過ぎた。
持ち前の記憶、思考を以てすれば登校免除までもを得られるのだから、其の後の人生が如何に温いか、退屈か、其れが窺い知れて、致し方もなく。隣人との関わりもまた同様、退屈極まるもので長く続かず。其の上、白子の特徴、美しい容貌といった人目を惹き付ける外見や、臆病ひた隠すべくの、人を食ったような口振りも災いしたのであろう。彼女は往々にして孤独であった。
苛ませるはひしひしと伝わる肉親含めた他者からの排斥、そして退屈という名の絶望。其の後、ほどなくして幸か不幸か、舞々は此処へと隔離され、長い年月を独り過ごして今に至り、そして未来はどうなることか――
さて脱線が過ぎた、状況へ戻ろう。不気味な来訪者に対して一歩も引かずに、舞々が拒否の意志を告げれば、
「本当に出てこないの？」
来訪者は再確認を。
「ああ、恐らく僕に限らず、誰しもが同じ返事をすると思うけどね。さぁ、早く帰ってくれ」
「貴女が素直に出てくれさえすれば、今直ぐにでも帰れるのだけれど」
「それだと君は永久に帰れないんだが」
「いいえ、そんなことないわ。貴女が出てくれさえすれば、すぐに帰れるもの」
「だから僕が出てくる、という君の前提がありえないと言っているんだが。察しが悪いね」
「前提がありえないのがありえないわ。むしろ絶対に貴女は出てくる、断言してもいい」
「もしかして兵糧攻めでもするつもりかい？　もしそうならばやめておいた方が良い。徒労に終わるよ？」
「そっか、貴女はお腹が空くものね。でも、私はそんな悠長な真似ができるほど、気が長くないの」
「此処で無駄に時間を費やすのには我慢できるのかな？」
「微妙なラインね。まぁでも、そろそろ終わるわ」
鍔迫り合いの舌戦というべきか、或いは幼稚も極まらん口喧嘩か、一歩も引かず、といった具合に互いに意固地、平行線のまま。舞々の心中に燻るは苛立ちを越した、敵意。モニターに映る

薄気味の悪い少女への敵意であった、
「そうだね、終わらせようか」
一拍、舞々は息を吸う。
「もう一度だけ告げる、早く帰れ」
対しての訪問者は、
「貴女が素直に――もう言わなくてもいいわよね？」
膠着――堂々巡りのやりとりはもはや意味を成さない。舞々も気が長い方ではなかった。
「……埒が明かないな。まぁ気が済むまで好きにすればいいさ。僕には関係ない」
彼女は来訪者との繋がり、インターフォンの電源を落とした。モニターは光を失って黒塗り、来訪者の姿が舞々の視界から消えた。
最初からこうすれば良かった、舞々は何時しか熱に、熱くなる血潮に駆られ、薄気味悪い来訪者相手に挑発捲し立てていた自身を恥じる。
――しかし舞々よ。何故、退屈に囚われているはずのお前が、熱帯びた血に駆り立てられたのだ。何故、我を忘れてあの少女と舌戦繰り広げたのだ。
彼女は其の時、退屈をしていなかった。其の事実にまだ気付いてはいない。

「一体あの女はなんだったんだ……」
一人ごちるは引き籠りの舞々、怪しい来訪者に門前返し決めてようやく平常へと。其の平常が果たして彼女に好影響なのかは扨て置き、舞々が安息一つ吐いて先の一件を想起すれば、あれは一生忘れることはできないだろう、と抱かせしめる、来訪者の顔が浮かんで苦笑。
「本当、なんだったんだろうな。おかしな奴もいるもんだね」
微か、微かながらではあるが舞々の心中にはかの来訪者への好意が生まれていた。無論、其れは無自覚のことであり、再度彼女と話そうだの、外に出てみようなどとは塵にも、である。
「へぇ、そういう真似をするならこちらも容赦しないわ。最後通告よ、出てきなさい」
心臓が跳ねるとは緊張解いて、安息を洩らしたばかりの舞々のこと。聞こえる声は疑いようもなくあの来訪者のものであるが、其れはよもや重きを為さない。今、彼女を困惑、いや混乱させているのは其の手段。いくら大声を出そうとも、完全防音である城塞の中には届くことは万が一にもありえない、そもそも声は叫ぶようでも、怒鳴るようでもなしの落ち着き払った静けさ感ぜられるもので尚更のこと。
「な、何が……、えっ……」
混乱するのもむべなるかな、これは常人でさえ狼狽えること必須の超常現象に他ならず。
されど舞々よ、これは致し方ないことなのだ、この現実を受け入れよ。いや受け入れる未来しかもはやないのである。
「最後通告よ。もし応じなければ相応の手段を用いることになるわ」
出処の分からぬ其の声が再度聞こえれば、其れは脅迫。相応の手段――物騒極まらない其れが、既に現状を理解しよう、と回転し切りの舞々の脳へと、揺さ振りを掛ける。
「君は……、君は一体何者なんだっ……！」

其れは今迄の冷静沈着に綻び生じた声量の、問い質すような声色の、舞々自身、予期しなかった熱を吐き出さんばかりの声であった。
果たして彼女が大声を出したのは何時ぶりか。彼女の出来の良い頭の中には、未だ其の時の記憶は残っているのだろう、が察するだけでも幾らかは窺い知れようというもの。彼女は熱を取り戻しつつあった。
「……というか、僕の声は届くのか……？」
大声発したことが功を奏したのか舞々、来訪者の声聞こえども、自身の声が届くとは限らない。其れに気付く程度には落ち着きを取り戻したようで。
「ええ、聞こえているわ。だからあまり大声出すのはやめて頂戴」
くすり、と笑い混じりに来訪者から返事が。理屈はさっぱりではあるが、二人の声を繋げる構造が其処にはあるのであろう。
「き、聞こえているんだね……？　き、君は何をしたんだ？　どうやって今、会話が出来ているんだ？」
聞こえる事が分かった舞々は、やや上擦って吃音あるものの平生を繕いながら問い掛ける。も、素直に教えてくれるような来訪者ではないのは明らかで。
「それを教えるのは貴女が此処へ出てから。それまでは御預けね。それで、どうするのかしら？　あまり手荒い真似はしたくないのだけれど、貴女の意志が頑なであるならば……ねぇ？」
頑なに自身に関しては口を閉ざして来訪者、徐々に、そして確実に舞々を追い詰めてゆく。其の語調は顔が見えずとも妖しげで、危機感を舞々に抱かせしめる。けれど――
「ごめんよ、僕の意志は頑なでね。御断りだ」
淀みなく、断固拒否。其れは引き籠りとしてか、其れとも屈服することへの嫌悪感か、何れにせよ誇り高いことには違いない。しかし舞々の心中に芽生えた其れは矜持に非ず、もっと素直で、純粋なもの。
「そう、残念ね。ならば相応の手段を用いさせてもらうわ」
最後の交渉が決裂して、来訪者は『相応の手段』を用いることを宣言する。
「相応の手段……？」
「ええ、『酷い目』は避けられないわよ。覚悟してね」
其れは武力行使を彷彿とさせて酷い怖い恐ろしい。けれど舞々は――
「……く、くくっ、ああ、いいよ、見せてよ。その、相応の手段とやらを見せてくれよ。『酷い目』に遭わせてよ」
舞々は笑っていた。身に危険及ばんこの渦中に、愉しみを見出していた。
其れは未知に対しての渇望、退屈な日常からの脱出。
自身の理解が及ばぬ技術を持った妖しい来訪者、其の彼女の奥の手に舞々は期待を、希望を見出しているのであった。

「さぁ、早く始めてみせてよ」
あろうことか自身に向けられる『相応の手段』を待ち望んで舞々、期待に胸躍らせんばかり。

高まる鼓動の早いこと、沸き立つ血潮の熱いことは寒さも忘れ、包まる毛布を脱ぎ捨てる程。今の彼女ならば外に出ることも苦にならず、であろう昂ぶりようであった。
「一瞬よ。瞬きしては駄目だからね」
来訪者はくす、と笑いながら告げる。『相応の手段』とは一瞬の内に終わるものらしい、しかし殊更危険な雰囲気がありありと。さもすれば一瞬で身体形造る細胞組織を分解させて、はいさようならだとかの生殺与奪が自由な類、謂わば生命の危機すら感ぜられる程なのだが、
「ああ、折角の『酷い目』だからね。端からそのつもりさ」
ここで挑発、煽り文句を以て返すのが、退屈から抜け出したばかりのこの舞々である。
とはいえ彼女も阿呆ではない、むしろ聡明な方であり一応は目論見が。というのも来訪者の目的は、自身を外に出すことなのだから易々其の命奪うような真似はしない、という事であるが――どうだか。あの女ならば、別に外に出せるならば死体でも構わなかったの、とかさらりと言ってのけそうであるが、果たして。
「――じゃあ、いくわよ」
これから相応の手段を用いる、来訪者は舞々に告げる。
「ああ、何時でもいいよ」
一体何が起きるのか、迫りくる未知に舞々は目を見開き、胸に莫大な期待を、そして微量の覚悟を以て、其の時を待つ、のだが。
「はい、終わったわよ」
……一瞬、来訪者の言葉に嘘偽りは一つもなく、正しく一瞬も一瞬であったのだが――何も起こってはいない。そう、何も起こっていないのだ。
「ごめん、教えてくれるかな。一体何が起きたんだい？」
瞬きするな、と見開いたまま、瞳孔開いて紅色。其れは怒りに震えて滾る血の紅。許すまじ裏切りへの憤怒の紅。
「そ、そんなに怒らないでよ。仕込みが終わったの」
其のあまりの形相はかの来訪者も言い淀む程で、弁明しなければ時空飛び越え、来訪者の頬めがけて平手の一発かましてきそう。
「仕込み？」
瞳孔開いて危ない人のままに訊く舞々へ、来訪者は一回、咳払いをして調子整え、
「じゃあ種明かしするわ、瞬きをして頂戴」
「瞬き？　するなって言ったじゃないか」
「いいから。してみれば分かるわ」
「本当だね？　もしこれで何も起きなかったら二度と口を利かないからな」
「ええ、いいわよ。そんなものはありえない未来だから」
来訪者の少女はよく笑う。尤も舞々からは其の姿が見えない故、口振りからしか判別できないのであるが、其の少女はずっと微笑んでいた。
「そろそろ目も疲れてきたし、いくよ？」
「ええ、どうぞ。いつでも、どうぞ」
舞々は瞼を閉じる。長らく開けっ放しにしていた為か、乾きが込み上げ強く、強く閉じる。

そして『相応の手段』は、舞々を外へと導く其れは、発動する。

目を見開けば其処は――何処か。舞々の記憶には存在しない、其れどころかあまりに特徴欠けているような、特徴多すぎるようなの、文字として筆することすら憚られる異形の空間であった。
幾ら強く、とはいえど所詮は瞬き、舞々が視界を奪われていた時間は三秒とない。けれど彼女は長らく居続けたかの根城から、何処とも判然としない謎の空間へと移動していた、いやさせられていて――絶句。瞠目、開口するばかり。
舞々の心中を埋めるは感嘆の念。退屈も絶望も超越して、自身は此処へ来るべく生まれてきた。そう抱かせしめてならずの、ただひたすらの感激。
「気に入ってもらえたかしら？」
其の声が、来訪者の声がしたのは舞々の背後、であろうか。そもそも背後、後ろとは此処においては何を意味するのであろうか。異形の空間をして、舞々にはもはや理解が及ばずにいた。
「いいのよ、それで。深く理解する必要はないから。ただ感じなさい、委ねなさい」
続けられる声に従って、舞々は考えるのをやめた。此処では上下左右、前後の概念、いわば空間でありながら空間を空間せしめる要素が抜け落ちていて成程不可思議。無論、其れは俯瞰的な概念、言うなればこの来訪者のみが知り得ることであり、舞々には到底理解できるものではない。其れに彼女は既に考えることをやめているのだから、ただ心の動くまま、成すがままに漂うのみ。
「此処は……、此処は何処なんだい？」
ようやく発された舞々の一声、未知への好奇心、そして温かみの込められた心底の言葉が来訪者へ、と。けれど彼女は口を開いてもおらず、喉を震わせてもおらず、其の言葉は果たして何処から発されたのやら。
なれど来訪者には届いている、届かないはずがないのである。
「此処は私の部屋よ。永遠に死なない過去と、永遠に生まれる未来、そして一瞬に在り続ける現在。それらのすべてに隔絶されて、連結されて、時の流れを観通すだけの、ただそれだけの部屋」
――そう来訪者は言えど、何が『それだけ』のことであろうか、というより何を言っているのやら。よもや地の文さえもついていけぬのだから、舞々には無論。伝わることはひたすらに圧倒的、いや超常的な規模の大きさのみ。
なれど来訪者の少女は其れをも知り得ているのか、笑んでこう続ける。
「要をすれば、というより貴女達に親しみやすく言うなれば四次元空間、まぁ厳密にはまた違うのだけど、そういう場所だと思ってくれていいわ」
四次元空間――彼女は此処が三次元の域を越えた上位次元である、と。
「そして私は此処の主、此処で一瞬を永遠に、永遠を一瞬に、世界を傍観するもの」
彼女はすべての次元を永遠として、現在として生きる傍観者である、と。
――舞々は今、四次元と、未知と遭遇している。

二人が此処へ来てから如何ほど時間が過ぎたであろうか、そもそも時間は過ぎたのであろうか。其れすらも判断付きかねて、やはり其処は超次元。
「つまり、此処は何処の時間にも繋がる四次元空間で、君は其処で覗き見を生き甲斐にしている人、ということでいいのかな？」
長らくの説明を掻い摘みどうにかこうにか、ようやくの理解を済ませる舞々、けれど何処となく其の表現には棘があり、来訪者は苦笑湛えて。
「覗き見、という言い方はやめてくれる？」
「いや、でもそうとしか感じられないからさ……」
今の舞々は感性の下に生きており、それでそう感じてしまったなら、訂正は不可能。其れに心底から覗き見が趣味と思われては、幾ら理解の範疇を超えた四次元に生きる者であっても威厳も欠けようというもので。
「まぁ別にかまわないのだけど――」
一拍置いて、四次元の少女は続ける。
「まさかあの可愛らしかった子が、こんなダメダメになるとは流石に思わなかったわ」
少女が思い描くは幼き日の舞々、穢れのない紅の眼差し向けてくる姿。舞々からは遠い昔の事であるが、少女にとってはつい先程（この表現も四次元に生きる彼女に相応しいものなのか自信は持てないが）、彼女が見ていたかの光景――
「貴女も覚えているでしょう？」
然様、舞々は覚えている。ただ根本にある舞々の認識、人間は変わりゆくもの、其の認識が過去と現在、そして未来永劫不変の少女を理解し切れず、靄をかけていただけで。
「またね、って言ったでしょう？」
理解を、認識を越えた未知が、少女は微笑んだ。
「あ――」
舞々の、もはや苔生したかに古く朧気、されど絶対に朽ちることのない、其の記憶の靄が晴れてゆく。鮮明になってゆく。
幼き日の四次元の少女との邂逅が今、感性の下に思い出される、時を越えて結びつく、紡がれてゆく。
黒の長髪靡かせた彼女の、十年経てども全く違わぬ、その姿が今――
「僕は昔、君と出会っていたんだ」
舞々が再び少女と出会うまでに、幼女が少女へ変わる程の、十年あまりの時が過ぎていた。
「ええ、つい先程ね」
少女が再び舞々と出会うまでに、三次元の人間にして十分に満たない時しか経っておらず。
「それじゃあ感動の再会、とはいかないね」
「そうね、なら今後は再会する必要がないよう、ずっと離れずにいましょうか。無駄に退屈を過ごしている今迄よりかは、幾らか楽しませてあげられると思うけど」
「ああ、是非お願いしたいね。君ならば僕を――」

　此処で舞々、何かに気付いたのか、一度途切れてから、
　「ーーってこの流れももう既に君は知っているのかな。いや全く、面白いよ、本当面白い」
　「ああ、成程ね。貴女の言わんとすることは分かったわ。でも、私はそれをしないでとっておいてるの。これから貴女の傍で未来を見ていこうとしてるのに、先を知ってしまったら面白さ半減でしょう？」
　「……まぁいいや」
　しれっとぬかす少女に対して、自身の未来を映画か何かと違えているのでは、そう舞々はほろ苦そうな笑みで続けて、
　「……いや全く、君と出会えるのがもう少し早かったら、こんな退屈せずに済んだのにさ」
　「あら、それなら今からあの時の貴女に接触してもいいわよ？」
　もし幼い頃、彼女と出会っていたのなら、今し方心震わせる情動をあの時、湧き上がらせていたのなら、今頃どうなっていたのやら、興味深くはあれどーー
　「しても、今、此処に生きている、君と接している僕には何も関係ないだろう？　また違う生き方をした僕が新しく生まれるだけで、さ」
　「ええ、それはその通りよ。説明する手間が省けて助かるわ。それにね」
　「何かな？」
　「非の打ち所のない人より、幾らか駄目な人の方が、私は好きよ」
　とびきりの笑みで言う少女へ、傍から見てるだけならそうだろうさ、とは頬を朱に染め照れ隠しの舞々の弁。二人がこう屈託なく笑い合うまでに、如何ほどの時が過ぎたのか。其れは三次元に生きる舞々はおろか、この地の文でさえも知る由のないことで。尤も其れを四次元に生きる彼女に問えば、およそ『深く考えないでいい、ただ感じなさい』と一笑に付されてしまうであろうからしてやはり其処は超次元、理解し難いもの。
　しかし、差し出がましいことを重々承知で、この地の文の思考停止の末を晒せば、其処は少女達二人しか知り得ずの絆、そう感ぜられてならないのであった。

　次元を越えて繋がった二人、暫く和気藹々、仲睦まじく過ごしていたが其処は筆し難くあれど、四次元の者には面白み欠けており、曰く此処が退屈だから覗き見しているとかなんとか。
　覗き見に興味ありと舞々が時空飛び越え歴史の域に至らん過去を一瞥しようと試みるも、三次元の住人には不可能なよう、少女に教わった通りにしても一向に見えず。空間自体に慣れも合わさり、徐々に飽きが生じてきて嗚呼、なんと人間の無い物強請りであろうか。とどのつまり今は、そろそろ三次元へと戻ろう、そう二人が方針定めていた頃合いであった。
　「あのさ、一つ気掛かりがあるんだけど、訊いていいかな？」
　舞々の脳裏にふと、気掛かりとして浮かんだのはある言葉、彼女が此処へと連れていく際のある言葉。
　「何かしら？」
　「いや、心当たりがないなら別にいいんだ」
　「物思わせぶりね。言ってみなさいな」

「ああ、じゃあ戻ったら、戻ったら言うよ」
「そう、じゃあ一旦戻りましょうか」
此処はあまり長居するには向かないわ、と少女は続ける、が其の声色に獲物を狩る獅子の如くの、嗜虐の色が混ざっていたことに、この引き籠りは気付いていたのか。其れとも薄々気付いていたからこそ、気掛かりを抱いていたのであろうか。兎も角、舞々が目を瞑り、少女と共に次元を越えよう、そう意志を掲げた其の刹那――
「ああ、気掛かりってもしかして『酷い目』のことかしら？　それなら安心して。これから遭わせるから」
嗚呼、してやられた――そう思えども後の祭、目を開けば三次元、見慣れたかの根城へと舞い戻るは舞々。なれど、どうにも勝手が違う、というよりすこぶる寒く殆ど反射的、パーカーのポケットへと両の手を突っ込む、のであるが――
「あれ……あ、なっ……」
寒いのも至極当然のことであろう。パーカーから下着まで、何から何まで衣服の類が失せて、舞々はすっぽんぽんなのだから。
「あらあら、手違いかしら」
そう嘯く四次元の少女であるが確信的、常々よく薄ら笑みを浮かべているが、今回は一際楽しそう嬉しそう。
「……ちょっ、ふざ、ふざけるなよ！」
冷房の過ぎる其処は全裸でいるには厳しい寒さ、胸と股を隠すよう、身体を丸め震わせて舞々、声を荒立て異議申し立てるが、
「随分と寒そうね……。私が温めてあげるわ……」
そう言いながらじり、と近付いてゆく少女が聞く耳を持つはずもなく、
「待て、待ってよ！　さっきまでこんな雰囲気じゃなかったじゃないか！　ねぇ！」
「さっき、って何時のことかしら？　十年前？　十分前？　それとも十秒後？」
のらりくらりと詰め寄りゆく少女の姿はまさしく肉食獣、成程『酷い目』にも遭わせながら楽しませようとはこういうことか、中々小粋に思えるのだが、其れは外野の意見。当事者が身体震わせるのはあながち肌寒さだけでもなさそうで。
「嫌だ、そういうのは嫌だから！　やめて、やめてよ」
「『酷い目』に遭わせてみてよ、って笑っていたのだから大丈夫よ。怖いのは最初だけ、感じなさい、委ねなさい」
「嫌だ嫌だ、嫌だああ」
嗚呼、退行極まりよもや駄々っ子。けれど舞々よ、頬が朱いのは只冷えただけではないのであろう？　口元仄かに笑みと緩めて、いやよいやよも好きの内。
後は二人、好きにしてくれ。これより先はお楽しみ故、地の文は撤収するとしよう――

外が熱帯夜であろうと此処はお構いなし、冬のよう。舞々ともう一人、四次元に生きる少女が居住み始めたとある部屋。

後、十五分もすれば日付が変わろうという頃合い、四次元に生きるくせして眠るのか、というより専らいじめられていた側の、自身の方が先に意識手放して然るべきでは、そんなことを思いながら舞々は隣ですこやか、寝息立てる少女を見つめていた。

「綺麗な黒髪だな……」

白い寝具に幾何学模様を描かんばかり、薄らと灯る電燈の光に艶めいて鮮やかの黒色、少女の髪を指先で掬い、そっと撫でる。時の流れ、老いとも無縁であろう其れは絹の如く柔らかで舞々は微かに笑みを。

「身体まで奪ったんだから、責任はとってくれよ」

先の記されずの一件を想起したのか、そう呟いて、白に仄かな朱を織り交ぜた美しくも可愛らしい寝顔、其の頬を撫でる。

掌に伝わる人肌の熱、手首に微かに当たる寝息、それらは少女が今、こうして現実に生きていることを顕にして、舞々を安堵させる。

　誰かが傍にいる、そんな夜は何時以来だろうか。舞々はふつ、と思った。それは彼女の記憶力を以てすれば直ぐに、鮮明に思い出せるであろう。しかし彼女は記憶を巡らない。
　舞々は現在を生きるべく――ただ目前の少女の、其の頬へと、くちづけを添えて、
　「ずっと一緒だよ」

　彼女が求めていたものは何ぞや、そう問われれば退屈からの脱却、であったことには違いない。けれどもしかするならば、もっと素直で、単純なもの。喩えを挙げるのならば――
　同じ時を共に過ごす理解者、友達であったのかもしれぬ。

「君ならば僕を――僕を一人にしないだろうしね」

作家紹介

竹見名央

フィッツロビンと前向きな街

幻想小説を得意とする。 わけのわからない発想で周囲を翻弄する人物。

Q

レストラン・グラフィティ

人間の心境、またその関係を描く作品を執筆する。純文学を志向している。

池之沼気違衛門

舞々コンタクト

萌え表現の探求者。 マジキチ。

絵師紹介

えりな

篠屋

積塵

表紙イラスト

小茶菓こう

編集部

松原葵

紀谷実伽留

斉藤裕之介

△ｔ（でるたてぃー）

木村千佳

あなたの気に入った作品に投票しよう！

「月刊エトランゼ」を手に取っていただきありがとうございます。
当サークルでは、より良い雑誌作りを目指し、今後の改善、内容充実を図るため、読者の皆様に、作品の人気投票を行っております。
下記リンクにアクセスしてご回答ください。ご協力よろしくお願い申し上げます。

月刊エトランゼHP

http://kmit-monthly.weebly.com/

《特集》今すぐ応募出来る文学賞

短編募集・賞金あり・いつでも応募可能！？
文芸島民必見！

　年始は何かと忙しく、不意な出費も増える時期だと思います。　お金が欲しい……けれど、アルバイトをするのは面倒だったり、時間がなかったり。　そんな皆様のために、今回編集部では、手軽に応募できそうな新人賞の情報を集めてみました。
　まず紹介するのは、ウェブコバルトの「短編小説新人賞」です。
　隔月ごとに募集していて、賞金は入選で20万、佳作で10万と、結構高額。新型のＰＣにも手が届きます。
　ジャンルは特に指定がなく、自分が書きたいもので勝負することが出来るので、メモ帳に書き留めたまま使う機会がなかったアイデア達を活かすチャンスかもしれません。
　応募原稿は原稿用紙（４００字詰め）換算で25～30枚と、比較的書きやすい文字数。
　選考に残れば審査員の方から細かな選評をもらえるので、普段あまり小説を書かない、短編を書くのが苦手、という方も応募してみてはいかがでしょうか。

　次に紹介するのは、ご存知の方も多いであろう、小説現代が開催する公募「小説現代ショートショートコンテスト」。20年以上の長い歴史を持つ公募で、こちらは毎月の募集になっています。
　ショートショートということで、応募原稿は原稿用紙５枚未満とかなり短いものになっており、その分賞金も２万円と、ほかと比べて控えめ。
　２０００字なので、埋めるだけなら簡単に出来る文量ですが、実際に書き始めてみると、短い文字数でまとまったストーリーを書き上げる、ということの難しさがよく分かります。
　それに加え、入選のためには応募作品の中で埋もれないような、個性ある筋書きが必要になります。　発想力、文章力に自信のある方は応募してみてはいかがでしょうか。

【応募要項】
小説現代ショートショートコンテスト
・応募原稿　原稿は縦書き、４００字詰め原稿用紙５枚以内　ワープロの場合はA4版の無地の用紙にプリントア　ウト
・入選発表　優秀作は「小説現代」誌面に掲載 ・賞金　掲載作品に２万円の賞金
・締切　各月末

cobalt短編小説新人賞

・応募原稿　原稿は縦書き、４００字詰め原稿用紙25～30枚

・入選発表　「cobalt」誌面にて発表

・賞金　入選20万円、佳作10万円

・締切　偶数月の10日（当日消印有効）

それ以降に届いたものは自動的に次号応募分として受付

※この情報は２０１４年１月時点です

※応募の際は、各賞の要項をウェブページ等で確認してください

月刊エトランゼ　創刊号１

http://p.booklog.jp/book/81327

著者：kemmy
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile

発行：日本大学芸術学部文芸学科　サークルKMIT（ケミット）
URL：http://kmit.weebly.com/

小説執筆：Q/竹見名央/池之沼気違衛門
イラスト：篠屋/えりな/積塵
表紙：小茶菓こう
編集：紀谷実伽留/斉藤裕之介/△ｔ（でるたてぃー）/木村千佳
発行者：松原葵

月刊エトランゼ　HP
http://kmit-montly.weebly.com/

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/81327

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/81327

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ